

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十六卷第八号（通巻第一八八号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第188号

12. 2009

電子声

品川 鈴子

連理杉くぐりて寡婦の霧合羽

臥す折れる聳ゆ記紀杉秋湿り

詠めずとも山の錦を目に溜める

老いの眉ひかへめに描き紅葉狩



床下は落葉溜まりの奥の院

提げ袋探せど尼は片手套

グリム童話見直す老のクリスマス

電子声しゃが嗅れサンタと庵籠り

玻璃隔てインカのミイラ年詰まる

不義理決め茶房にひそむ大晦日



玉鈴

吟

兵庫 栗田武三

大いなる月上りきて魚信絶ゆ
太刀魚の月にぎらりと釣られけり
月天心はたりと風の熄みにけり
若後家のいざよふ月に佇ちつくす
天窓に顔を出したり居待月

大阪 小阪律子

草の笛糺の室の香にむせぶ
売り物にならぬ十尾を鮎雑炊
葉の裏に薄羽蜉蝣番いたる
門川にトマトの浮かぶ茅葺き家
夕顔汁白馬麓の杣料理

東京 後藤とみ子

衣被ぎ跳んで気まづさほぐれをり
秋日傘犬の歩みに合はせをり
幕すすみ調子出て来し盆芝居
耳許にふと現れし残りの蚊
さんま祭り生きてるやうに小銭跳ね

大阪 小林 玲子

朝顔の実の付く一花床掛けに
曳き売りのはねる小鯛手でおほふ
瀬祭忌くりぬきのある文机
借り主の名札うすれし稲田熟る
紅にじむなんばんぎせる口もとは

香川 近藤 倫子

内定の知らせ無きまま虫の秋
辻褄の合はぬ言ひ訳休暇果つ
やり直したきこと数多木の実落つ
子の寝息聞きし日遠く虫時雨
秋祭職探す子も辞める子も

兵庫 坂口三保子

吾亦紅咲き初めし頃君召さる
よろよると何を捜すか秋の蝶
下草を刈りたる後に栗落す
雉鳩が萩叢出でて花散らす
秋冷や物作る人工房に

兵庫 佐方 敏明

赤とんぼ浜でハモニカ吹く翁
秋灯にモヒカン刈り児漫画読む
叢追はれ昼のこほろぎとぼけ顔
釣り人ら暁の満月気づかざる
秋扇ベンチで休む太り肉

東京 佐田 昭子

雲居より丸くくつきり後の月
萱人形朽ち果て土に還りけり
奥入瀬の阿修羅の流れ木の実落つ
穴まどひ天満宮の商店街
横須賀港一望の園秋の薔薇

兵庫 塩出 眞一

二つ目の島は空港雲の峰
次々にペンギンあくび秋暑し
パピルスの根方に群るる熱帯魚
奈良町に寄席の呼込み秋暑し
飛鳥なる奇石めぐりて秋夕焼

香川 島内 美佳

一日で踊り覚えて本番へ
行列のできる媼のかき水
こんなにもあるのか山の夏の星
溪谷の中より狭き夏の空
赤とんぼ飛ぶ四万十の沈下橋

大阪 島 純子

稲穂たる里に点々石の蔵
台風さけマストひしめく川奈港
姉妹寄り秋の川奈で夕食会
夕焼けに天城の山は墨絵なり
川奈道青柿ふさぎ土手をゆく

大阪 島本 知子

トランクの開いて飛び出す天道虫
テント張る家族四人の六平米
母と子の五分で済ますシャワーかな
青芝をさくさく踏んで走る児ら
キャンプから戻るなり児はテレビつけ

愛媛 鈴木 てるみ

巻きスカート泳ぎの浜にいる気分
秋立ちちて岬の寺へ納骨す
運動会百足競走腰痛む
三つ編みの子が指揮をする運動会
敬老日卓球台の茶席にて

大阪 鈴木 浩子

涼しさは大師の数珠に触れてより
童謡の聞ゆる茶房水菓舐む
ペディキュアの軽き下駄音秋海業
水占に病ひ重しと吾亦紅
美術展いとこ同士の額並ぶ

薬草歳時記

(一八七) フユイチゴ(冬母)

菅原由紀

あるときは雨蕭々と冬いちご

飯田蛇笏

それはすてきな母の絵だった。赤い実と青い葉の絵にすこし違和感を持つてその和漢草の本の表紙を眺めた。

母は春のものと思っていたので、一月か二月号の表紙に目をとめたのだろう。最近の歳時記に冬の季語として出ているという。

クリスマス用のショートケーキに思いを馳せ、冬の季節の訪れを感じたのを思い出した。

クリスマスのはじめは促成栽培の季節はずれの農作物で、薬用のフユイチゴとは異なつたものであると。

フユイチゴは野生種であり、キイチゴの仲間、つる性で地面をはう。葉は丸味を持ち、深くは切り込まない。常緑の葉は林の中で冬も生きて、直径一センチほどの実をつける。フユイチゴの実を食べられる。

千葉以西、四国、九州、朝鮮半島、中国、台湾の暖帯地帯の低い山のかげに育つ。二〇〜三〇センチの高さで、九月から十月にかけて五〜一〇個の白い花をつける。

薬用部分は葉、全草。寒母葉、寒母根かんぼこんという。夏から秋に取り入れて日干しにする。全草と根に精油を含む。

強壯薬として肺結核の咯血の治療に用いられた。

寒母根は清熱、解熱、胃痛、月経不順、痔、虫垂炎、肝炎に十五〜二十五グラムを煎じて服用する。

イチゴは世界各地に分布。ヨーロッパでは野生のイチゴを摘んで食べる習慣があつた。草イチゴやキイチゴを摘んで口に入れると、甘ずっぱくておいしい。特にノウゴイチゴやシロバナノヘビイチゴなど。幼い頃の散歩を思い出しつつ、気持ち甘ずっぱくなる。

北アメリカの野生のバージニアイチゴと南アメリカのチリイチゴの名で有名なキロエンシス種を一七五〇年頃オランダで交配、大粒のイチゴが出来た。これが今の大粒のイチゴのルーツと言われる。

イチゴの赤い実は本当の果実ではなく花托というベッドの役目をしている部分で、真の実は外側のつぶつぶの部分である。

冬いちご森のはるかに時計うつ

金尾梅の門

参考文献 『牧野和漢薬草大図鑑』北隆館

『たべもの植物記』山と溪谷社

著者略歴 神戸薬科大学卒、薬剤師

フユイチゴ〔キイチゴ属〕(ばら科)

Rubus buergeri Miq. (冬莓)



果期:
11月~1月



薬用部分: 全草(寒莓葉)、根(寒莓根)
カンバイヨウ カンバイコン



E.S.

須賀
悦子
画

藪の中陣取り熟るる冬莓	田原坂へ続く道のべ冬莓	頬張れるほどは摘まれず冬莓	午後は日にとり残されし冬莓	山齒朶に添へたる赤き冬莓	冬莓雪明り遠く遠くあり	日あるうち光り蓄めおけ冬莓	余生なほなすことあらむ冬莓	蔓ひけばこぼるゝ珠や冬莓
*武智 恭子	*佐田 昭子	*勝野 薫	青柳志解樹	細見 綾子	加藤 楸邨	角川 源義	水原秋櫻子	杉田 久女

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

一歌手の小さき訃報虫の夜 兵庫 中村 紘
あさがほと向きあひ一日始め
金魚玉帰りし子等の置きみやげ
地藏盆終へし祠の傷あまた
地蔵盆終へし祠の傷あまた
百円玉ぼりと落しなすび買ふ 埼玉 松木 清川
消え残る B 29 の音敗戦日
高砂舞ふ氷川の杜の蟬しぐれ
網登る苦瓜緑のカーテンに
国なまり商い上手赤とんぼ 兵庫 福島 悠紀
秋暑しおひねり飛び交う繁昌亭
菓子処床几の上に円座三つ
おちよこらの所作きびきびと秋の寄席
硝子戸に頭突重ねる夕蜻蛉 兵庫 仲田 眞輔
八月の白垂の街の渴きかな
雲上の機よりコロナの夏日蝕
新興地車庫に玉葱吊り連ね
幼な児に歳を聞かるる金魚売 東京 堤 節子

黒出目金ばかり掬ひし親子連れ
コルク銃狙ひ定めて秋暑し
蟻螂の産卵夜半に見届ける
濁り酒環状線の高架下 兵庫 津田 霧笛
顔を描く石を探して秋の浜
秋うらら次期宰相は宇宙人
盆踊り影も踊らす投光器
山合の蜻蛉飛び交ふ登り窯 兵庫 長瀬 節子
球児等の声グランドに月見草
ざわざわと食べ放題の葡萄挽ぐ
水飛沫崖の囲りに岩たばこ
氷水特大の鉢平らげると 大阪 嘉悦 洋子
処暑の風達磨大師の衣剥ぐ
杭州の秋の食卓老師座す
地藏盆毬栗頭数珠廻す
九条を守る兄貴の登山帽 兵庫 有本 勝
蝸や梁の重なる寺の土間

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句〜十五句 後藤とみ子 //

*選句は全て 品川鈴子

一 歌手の小さき訃報虫の夜 中村 紘

一人の歌手が世を去ったという報道は、ニュースならひと言で終わり、新聞の片隅に芸名と本名をとどめたに過ぎなかった。でもひたむきな歌手を密かに応援していた自分は、大きな喪失感を抱いた。隠れファンとして、すだく虫の間に間にその歌声を追慕し、いつまでも耳底にとどめて悼みたい。

消え残るB29の音敗戦日 松木 清川

B29は超空の要塞 (Superfortress) ともいわれ、第二次世界大戦末期に活躍したアメリカボーイング社製大型長距離爆撃機。一九四四年六月の出撃以来、日本本土空襲に猛威をふるい、原爆投下も担った。私たちは敵機来襲の機影に怯え、機銃掃射の弾丸に逃げ惑う毎日だった。轟然と機体が飛び去った後もなお爆音が耳に残った。空襲は昼夜を分たず安んじて眠れる夜など無かった。酷い飢えと疲労の裡に敗戦の玉音を聞いたのでした。

おちやこらの所作きびきびと秋の寄席 福島 悠紀

京阪の芝居茶屋などで女中さんは「お茶子」と呼ばれる。幕間をてきぱきと機転を利かせて立ち働く。その動作が小気味よく、木の香も新しく復元された寄席小屋には欠かせぬ存在。上方の寄席も活気付き秋本番の書き入れどき。

硝子戸に頭突重ねる夕蜻蛉 仲田 眞輔

日が短くなり、家の外よりも、なかの電灯が明るく感じられる頃でしょう。作者がガラス戸の内側からふと外を見ると、大きな目のやま蜻蛉がガラス戸の同じところに何回も当たって、留まっています。頭突き重ねると表現されたので、その様子がよく伝わります。蜻蛉はガラス戸に写っているとなんばを確かめているのでしょうか。それとも明るさに誘われて寄っているのでしょうか。

幼な兒に歳を聞かせる金魚壳 堤 節子

お句を見て、思わずプツと笑ってしまいました。落語の一コマのようです。この幼児は日頃よく「おいুকつ？」と聞かれるのでしょう。幼児は、ご挨拶がわりに親しみを込めて、金魚売りに「おいুকつ？」と尋ねてみました。金魚売りさんは、笑っていないで「〇〇才です。」としっかりとお答えしないといけませんね。

盆踊り影も踊らず投光器

津田 霧笛

盆踊りと聞くとワクワクします。足取りも軽く、手振りもあざやかに皆さん踊っています。踊りの輪に加わりたくありません。中央に組まれたやぐらを中心に、色とりどりの提灯が四方八方に吊るされています。さらに広場を明るくするために、投光器も使われて盆踊りを明るく照らしています。輪になって踊る踊り手たちの影も、影絵のようにつつきりと映っています。盆踊りの一層の躍動感が映像のように見事に見えてまいります。

山合の蜻蛉飛び交ふ登り窯

長 瀬節子

人里離れた山合の斜面に沿うように作られているやきも

のを焼く登り窯。その辺りをとんぼが飛び交うという事は、窯には火が入っていない時でしょうか。心にしみる秋の山合のたたずまいが伝わってまいります。

処暑の風達磨大師の衣剥ぐ

嘉悦 洋子

処暑とは、二十四節気の一つ、八月二十三日ごろ、立秋から十五日目にあたるとある。暑さは残るものの風が吹くとさわやかな涼感を得る頃でしょう。達磨さんはインドから六世紀頃に中国にわたり、禅宗を伝えたとされています。座禅している達磨さんの人形は、願いが成就するという事で、縁起物として売られています。達磨さんが身につけているゆったりとした衣服は、風がよく通り、その胸元ははだけています。涼感が形となって感じられました。

兵卒の語り部となる敗戦日

有本 勝

兵隊さんとして実際に戦った方が、その戦争について体験されたお話をされる。それも八月十五日に。八月は先の戦争にかかわる追悼の日が集中しています。静かに語り部のお話に耳を傾けたいものです。